

## シリーズ8

# 「流れ」でおさえよう！

今回の『流れ』でおさえよう！シリーズは3回目、平安時代です。

平安時代と言えば、「鳴くよ ウグイス 平安京」ということで794年から始まりますね。そして、終わりが「いい国 つくろう 鎌倉幕府」の1192年（ただし、鎌倉時代の始まりは、最近「いい箱 つくろう 鎌倉幕府」の1185年という説が一般的になっています）ですから、約400年も続いた「長い時代」と言えます。

平安時代の大半は「死刑が実施されなかった」ので、「平和」な「良い時代」と言う人もいます。果たして、そうなのでしょうか？

確かに外国との戦争はありませんでした（1019年に、「刀伊の入寇」といって、女真人による対馬・壱岐・筑前への来襲があり、大宰権帥藤原隆家らが撃退する事件が起こりました）。しかし、国内では「平安」とは名ばかりで、東北の蝦夷征討や東国を中心に地方の反乱が起きていましたし、権力者が他氏排斥を繰り返していました。

それでは、平安時代の様々な出来事について、「流れ」をおさえながら、確認していきましょう。

## 第3回 平安時代

### <蝦夷征討の流れ>

伊治咎麻呂の乱（780年） → 坂上田村麻呂征夷大將軍（797年）  
781年に桓武天皇即位 桓武天皇が任命  
→ 胆沢城を築く（802年） → 志波城を築く（803年）

平安時代に入る前、光仁天皇の時代に帰順した蝦夷の豪族**伊治咎麻呂**が乱を起こし(780年)、30数年にわたって戦が相次ぎます。

桓武天皇は789年に紀古佐美を征東大使として派遣しますが、蝦夷の族長**アテルイ**に大敗します。

その後、**征夷大將軍坂上田村麻呂**が802年には胆沢城を築き、アテルイを帰順させ、鎮守府を**多賀城**から**胆沢城**に移します。さらに、**志波城**を北上川上流に築造し、東北経営の前進拠点としました。

このあたりは、前回の「奈良時代」とつなげておさえましょうね。

#### <藤原氏の他氏排斥の流れ>

**承和の変** (842年) → **応天門の変** (866年) → **阿衡の紛議** (888年)  
→ **昌泰の変** (901年) → **安和の変** (969年)

藤原北家の冬嗣は嵯峨天皇の厚い信任を得て、蔵人頭になり天皇家との姻戚関係も結んでいきました。

その子の**藤原良房**は承和の変で、伴健岑や橘逸勢ら他氏族を排除することに成功します。また清和天皇を即位させた良房は、外祖父として臣下として初めて摂政になり、応天門の変では伴氏や紀氏を没落させていきました。

良房の後を継いだ**藤原基経**は光孝天皇を即位させ、基経は初めて関白となります。さらに宇多天皇の即位の時には阿衡の紛議で橘広相を失脚させ、藤原北家の勢力を大きくしていきます。

その後、宇多天皇は摂政・関白を置かず、**菅原道真**を重用して「寛平の治」を行います。

続く醍醐天皇の時、**藤原時平**は道真を大宰府に左遷させます(昌泰の変)。醍醐・村上天皇の時には「延喜・天曆の治」と呼ばれる天皇親政が続きましたが、969年源高明が左遷される安和の変が起きます。これ以後、摂政・関白がほとんど常に置かれ、藤原北家(藤原忠平の子孫)が摂関を独占することになります。

#### <地方の反乱の動き>

**平将門の乱** (939~940年) → **藤原純友の乱** (939~941年)  
→ **平忠常の乱** (1028~1031年) → **前九年の役** (1051~1062年)  
→ **後三年の役** (1083~1087年)

東国で勢力を伸ばしていた桓武平氏のうち、**平将門**は下総で一族と争いを繰り返すうちに国司とも対立するようになり、939年に反乱を起こします。常陸や下野・上野の国府を攻め落とし、東国の大半を占領して新皇と称しましたが、平貞盛や藤原秀郷らによって討たれました。

同じ頃、伊予の元国司だった**藤原純友**も瀬戸内海の内海を率いて反乱を起こし、伊予の国や大宰府を攻め落としましたが、源経基らにより討たれてしまいます。源経基は誰でしたっけ？ そう、清和源氏の祖でしたよね。この2つの東西の反乱を「承平・天慶の乱」と呼びましたよ。

11世紀に入り、上総で平忠常が乱を起こしますが、房総半島に広がった乱を源頼信が鎮圧して、源氏が東国に進出するきっかけとなりました。

陸奥では、大きな勢力を持っていた豪族安倍氏を、**源頼義・義家**親子が出羽の豪族清原氏の助力を得て滅ぼしました。これが前九年の役でしたね。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原氏で内紛が起きると、源義家が介入し、**藤原清衡**を助けて内紛を制圧します。



後三年の役の後、「奥州藤原三代」が平泉を本拠地として、大きな勢力を築くことになります。



皇位継承をめぐって鳥羽上皇と争っていた**崇徳上皇**は、鳥羽法皇の没後まもなく、摂関家の継承をめざして兄の**関白藤原忠通**と争っていた**左大臣藤原頼長**と結んで、源為義・平忠正らの武士を集めます。

これに対し、**後白河天皇**は**近臣の藤原通憲（信西）**の進言により、平清盛や源義朝らの武士を動員して上皇方を破ることに成功します。その結果、崇徳上皇は讃岐に流され、源為義らは処刑されてしまいます。これが、「保元の乱」でしたね。

その後、院政をはじめた後白河上皇の近臣間の対立から、1159年には、清盛と結ぶ藤原通憲に反感をいだいた**藤原信頼**が**源義朝**と結んで兵をあげ、通憲は自殺します。しかし、清盛によって信頼や義朝は滅ぼされます。これが「平治の乱」でしたよ。

乱後、清盛は後白河上皇を武力で支えて昇進をとげ、蓮華王院を造営するなどの奉仕をした結果、1167年には**武士として初めて太政大臣に就任**します。また、清盛は娘**徳子**を高倉天皇の中

宮に入れ、その子の**安徳天皇**が即位して外戚となります。さらに、清盛の子重盛らの一族もみな高位高官にのぼり、支配の拡大をはかったために、排除された旧勢力から強い反発を受けることになりました。

ところで、平氏の経済的基盤は知行国や荘園であり、平氏政権は著しく摂関家に似たもので、武士でありながら貴族的な性格が強かったといえます。

しかし、**大輪田泊**を修築して**日宋貿易**を推進するなど、積極的な外交政策をとりました。その結果、宋銭をはじめ陶磁器、香料、書籍などが日本にもたらされました。そして、日本の文化や経済は大きな影響を受けることになりました。何よりも、貿易の利潤は平氏政権の重要な経済的基盤となっていきました。